

for Better Sound Creation

よりよき音色を求めて

前回で登場いただいた三澤慶氏。取材の最後に「あるもの」を発見した氏に、お仲間ともにあらためてその実力を確かめていただくべく、本誌取材班は「あるもの」を某所にお持ちすることにしたのである。さてその顛末は…

これ、音程いいね！

「あるもの」というのは、他にもないBSC (BrassSoundCreation) がひそかに開発していたC管。そのプロトタイプを見つけてしまった三澤氏は、非常な興味を示した。まずはそのスタイルに。そのプロトタイプのC管は、一見すると小型のB♭管（まあ、そんなシロモノは実在しないのだが…）か、D&E♭管（これらは実在する）のように見えるのだ。

通常、C管はクラシックのオーケストラで用いられる。ベルの長いスタイルで、B♭管に比べて明るい音色が特徴だ。オーケストラの最後列からきらびやかな音色で音楽を彩るにはぴったりのスタイル、に思える。しかし最近の研究から、この独特なスタイルは「音色がよい」と評判のB♭管のベルをそのまま活かし、マウスパイプからチューニングスライドを短くしたために、結果的に「ベルが長く」なってしまった、ということのようだ。

そもそも楽器のデザインは現在でこそどのメーカーのどの楽器もほとんど「同じ」ものばかりだが、これらの近代的な楽器の基礎的デザインが決まるまでには、実にさまざまなデザインが存在したのである。それが「淘汰」された結果、今のような状態になったのである。楽器のデザインと言うのは、さまざまな天才達がさまざまな提案をしてきた「結論」であり、それは、生命の進化の過程でさまざまな「生物」がデザインされ、淘汰されてきた



BSCのC管「アルモンド」を手にする小賀當氏と、BSCのB♭管（501G）を手にする三澤慶氏。神奈川県民ホールにて

過程と似ている。

いや、まだまだ「結論」はでていないのかもしれない…と思わせたのが、この衝撃的なC管との出会いだった。

「てっきりC管というのはああいうスタイルなのだ、と思っていましたが、こんなC管を見たのは初めてです」

そしてプロトを吹いた三澤氏は、その音程の良さにびっくり。というのは、C管は明るい音色で音程バランスが悪く、替え指を頻繁（ひんぱん）に使わなければならない、と思いつ込んでいた、というのだ。ところが、BSCのC管では、まったく替え指を使う必要を感じない、と驚く三澤氏。いずれにしてもプロトタイプなので、設計そのものが代わる可能性があるため、前回の時点では誌面で紹介するわけにはいかなかった。そこで、正規の製品

版が到着するのを待って再度の取材を約束していただいたのである。

待つこと数カ月。ようやく到着したC管を手にも、取材班は神奈川県民ホールに赴いた。三澤氏は、おりから26年ぶりの来日を果たした「ドレスデン国立歌劇場」の人気公演であるワーグナーの「タンホイザー」に出演していたのである。第二幕に登場する、舞台上の12名のバンダ（メインステージ以外で演奏する奏者はそう呼ばれる）のひとりとして。「今日は仲間にも意見を聞こうと思って、一緒に連れてきたんです」

と三澤氏氏から紹介されたのは、同じバンダとして出演する小賀當氏。三澤氏は東京音大、小賀氏は洗足学園時代から、同期のよきライバルとして切磋琢磨していた、という。現在はクラシック以外でもミュージカルやス

タジオなどでも活躍し、豊かな音色と、高音域でもやせることのない素晴らしいワイドレンジの持ち主である。

「天動説」全盛の時代に「地動説」を唱える、みたいな、画期的な提案ですよ

「すごい。替え指らないや」

と三澤氏。以前吹いていただいたプロトの時と同様の反応だ。小貫氏も、驚きを隠さずに語る。

「C管というのは、音程が悪いものだ、と思っていました。これは普通に吹けちゃいますね(笑)。倍音が多いし…今、新しいモデル買ったばかりなんですけど、もうちょっと早く知っていたら(苦笑)。買った楽器は、ばらばら吹いているといいのですが、音がタイトでちょっと…」

普通に吹ける、ということがこれほど驚かれるとは…。

「例えば五線譜の第四間の実音Eは、これまででは、2番を押さないと正しい音程では吹けない、ということが多かったのです。が、BSCのC管だと、そのまま開放で吹けてしまうんです」

さらに、三澤氏には作曲家(氏はそちらの分野でも大いに活躍されているのだ)としての見方もお聞きした。

「C管の音色は細くてきらびやかな、硬質なもの、と思われていますが、実は作曲家として考えると、B♭管とC管を音色の違いのために使い分け、というような考えはないんです。むしろその選択はプレイヤー側にありまして、B♭管だと指使いが煩雑になったり、音が外れやすくなるのを避けるため、純粋に機能的な理由ですね」

であるなら、音色を明るくするためにオーケストラではC管を使う、というのは「結果論」にすぎない、というわけだ。

「そうですね。むしろBSCのこの楽器のように、B♭管と吹奏感も音色感も変わらないC管、と言う方が本来の「あるべき姿」のような気がします。これまでそういうものはなかったの、他と比較のしようもないのですが…」

新しいC管は「アルマンド(注:ドイツ的な、という意味のフランス語)」と命名された。



「アルマンド」には、ベル側の延べ座がない B♭管と「アルマンド」を比べてみる C管(真)の方がベルが大きい



「アルマンド」を吹き、「これは地動説だ!」と三澤氏



C管を吹く小貫氏。「音程がすごくいい!」



これは天動説と地動説みたいなものですね、と、「アルマンド」のアイデアに心底驚いた面持ちの三澤氏。改めて製品版を手にとると、新しい発見もあった。

「通常のBSCよりもベルが少し大きいですよな…ロータリーのトランペットみたい…」

実は三澤氏はBSCの「シンフォニー」モデルを気に入って、しばらく吹いている。オケの楽屋などで吹いていると、「ドイツ管(いわゆるロータリートランペットはそう呼ばれる)みたいだね」と言われることが多い、という。「この『アルマンド』にもヨーロッパの音色を感じます。柔らかな音色ですね。名前からいっても当然か(笑)」

小貫氏も、三澤氏の言葉を受けて呟く。「これ、いろんな仕事で使ってみたいね…」

彼らは異口同音に、この「アルマンド」ならオーケストラ以外にもさまざまな現場で使えるのでは、と語る。

「たとえばラヴェル『スペイン狂詩曲』のF♯

から始まるソロもC管ならば外す危険性は少なくなるし、音量も出せる。吹奏楽でも積極的にC管を使ってみたらいかがでしょうか。吹奏楽でもさまざまな長さのトランペットをもっと使っていていい、と思うんです。この『アルマンド』ならB♭管となんの抵抗もなく持ち替えられるし、特殊な指使いも強要されないから、オケの編曲ものなどで、原調にこだわると♯が多くなってしまいうような時にいいですね」

B♭管よりも♯は確実に少なくなるから、余計なピストンを押さなくて済むようになる。ピストンを押す、ということは管をのぼすことである。管を長くしてその高次倍音を使う、となれば、高次倍音になるほど倍音の幅が狭くなるから音は外れやすくなってしまいうわけで、そんな危険をおかすより素直に「アルマンド」を使った方が安全で、その分音楽的な表現に神経を使えるようになる。

「この楽器は、話題を呼ぶでしょうね(三澤)